

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作：ウッチャン大好きっ子

＊＜＞で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

☆新キャラ

1. 明希（めいき）
2. 劉冥（りゅうめい）

～第6章～＜優しさと思い＞

警察による紅龍の鑑識等が終わり、刑事たちは警視庁に戻っていたが、きなこと船木はしばらく紅龍に残っていた。家族のことを心配してのことだった。

しかし、雁太郎は凱歌を心配し、「早く凱歌を助けてやってくれないか。」と船木ときなこに頼んだ。

きなこと船木はその真剣な目と気持ちを汲んで、警視庁に戻ることにした。しかし、戻る車中では複雑な雰囲気が漂っていた。

『きなこは凱歌を今も思いつづけている。』このことが船木の心に深く押し掛かった、、、。

—警視庁—

国際二課の部屋では、稲垣がパソコンに向かって何かを調べていた。それを他の刑事達が楽しそうに見ていた。

その光景に船木ときなこは、何をしているのかと驚いて近づいてきた。

「どうしたんだ？」と船木が刑事たちに言った。

刑事達は、稲垣のそばに船木ときなこを近づけた。二人がパソコンを見ると、そこには、「お話、聞かせてください」という投稿式のHPの1つの話が開いていた。

船木は遊んでいると思って刑事達を怒ろうとした時だった、きなこがこの投稿のページが開いている理由に気づいた。

「もしかして、この投稿って。ホイっ。王 凱歌の事が書いているの？」ときなこが言うと稲垣が答えた。「ええ、たまたまいつものように見ていたら気が付きまして。でも、はっきりとは断定はできませんが、それで皆さんに見てもらっていたんです。」

船木は、皆を怒ろうとした自分を恥じた。刑事達を信じて無かったことを、、、。

船木達はこの投稿を全員で検証してみることにした。投稿は、そんなに長いものではなかった。投稿されたのは昨日であった。でも、実際にこの出来事が起きたのは、2日前だった。

—投稿内容—

これは私の祖父の話を投稿したものです。

この出来事が起きたのは5月5日の深夜のことでした。

その日、祖父はたまたま海岸を散歩していました。

その時、波際に倒れている一人の男性を発見しました。

その男性は、大きな怪我は無かったものの体のあっちこっちに擦り傷や青痣があったそうです。

祖父は去年まで自宅の診療所で医師をしていたので、すぐに診療所に連れていったそうです。

診療所では、怪我の確認をして治療し、問題が無いのでそのまま寝かせておくことにしたそうです。

なぜその時に、警察や救急車を呼ばなかったのかと聞くと、「あの男性の怪我は高いところから落ちた怪我也あったが、何より暴行による怪我の方が多かったので追われているのではないかと思って。他にもあるが何よりわしの勘が知らせない方がいいと感じたのじゃ。」と笑って言っていました。

私の祖父は長年医師をしていたし、町でも信頼されている医師でした。それと同時に言い方が悪いのですが柄の悪い人も診ていた為、そういった事に詳しくだったのでそんな事を言ったのだと思いました。

治療を終えた後、祖父は寝たそうです。なぜかその日に限って10時ぐらいまで寝ていたので慌てて、処置室を見に行くと、もうその男性は居なかったそうです。しかし、処置台には書き置きが置いてあったそうです。

その書き置きには、怪我でうまく書けない様で歪んだ字でしたが、丁寧にお礼が書かれていて、その文には、彼の人柄を感じ取れたそうです。

とても礼儀正しい、優しい人と感じ取ったのですが、何処か日本人ぽくないと感じたそうです。

ここに投稿したのは、その男性が元気かを祖父が気にしているからです。

どうか、祖父に治療してもらった男性の方、もしこれを見ていたら連絡をください。

その男性は、黒の上着、黒の上下でかなりボロボロになっていたそうです。

－警視庁－

きなこ達刑事は、この投稿を見ながらきなこの家族の言っていた凱歌の姿と似ている事に注目していた。

雁太郎達は短い時間だったが、服装などをはっきりと覚えていた。

美智曰く、「黒の上下でかなりボロボロになっていて、擦り傷が多くて青痣もあった。」と言うのだ。

刑事達は、この投稿が凱歌の事を言っているのかを確かめることにした。

その担当を、この投稿を見つけた稲垣と立候補したきなこ碧河の3人がすることになった。

まず、連絡を取ることにした。連絡方法としてあったメールアドレスにメールを送ってみた。男性を知っていると言うことにして。

これはパソコンが得意な稲垣に任せた。きなこ碧河は連絡が取れるまで待機と言うことになった。

－2時間後－

稲垣のパソコンに書き込みの返事が届いた。

3人はメールを確認をして午後2時に会うことになった。もちろん、刑事である事は言っていない。言うとうってこない可能性があると言わなかった。

きなこらは会う約束をした診療所に向かうことにした。

－診療所前－

昼食を取った後、2時間ほどで着いた。車の運転は、碧河が担当した。きなこ違って、かなり運転がうまかった。これにきなこはふと『ホイさんは免許を持っているのかな?』と考えていた。

診療所では、投稿主の女性と老人が待っていた。

きなこ達は、作戦を考えていた。折角、凱歌そっくりの碧河が居るので、碧河に先に車から降りて

もらって反応を見ようというのである。

作戦通り、碧河が先に降りた。”反応は”というと、老人の方はかなり反応していた。
このことでの投稿の男性は、凱歌であることが核心に近づいた。

3人は二人に刑事である事。そして碧河が探している男性ではないことを告げ、
話を聞かせて欲しい事を言った。二人は戸惑ったものの了承してくれた。

—診療所内—

診療所内に入ると大きな泣き声がした。その叫びは誰かを呼ぶ声だった。「おにいちゃん〜！」と。
きなこは妙に気になり聞いた。「あの子は？お子さんですか？」と。
老人は、「わしの孫じゃよ。」と笑って言った。老人は孫の女の子をこっちに呼んだ。
女の子は、小学1年生になるかならないかぐらいの年で、泣いてぐちゃぐちゃになった顔でこっちへ来た。
その時だった、
さっきまであんなに泣いていた女の子がぴたっと泣き止んだ。そして、碧河の顔をじっと見ていた。
碧河は自分の顔に何か付いているのかと思い、顔を触ってみた。
不思議そうに女の子を見返すと、急に女の子は「おにいちゃん！」と抱き付いて来たので、
碧河はビックリしたが、ずっと女の子を抱き上げた。そして、「お名前は？」と聞いた。しかし、女の子は
逆にビックリした様に「おにいちゃん、覚えてないの？明希だよ。遊んでくれたじゃない！」と少し怒った
ように言った。しかし、碧河はこの子を見たことが無かった。

碧河ははっとした。『この子は自分を凱歌と勘違いしている。』と言うことに気が付いた。
碧河は咄嗟に凱歌の振りをした。
「ごめんごめん。明希ちゃん。色々あって忘れてた。どんな事して遊んだっけ？」と優しく聞いてみた。
明希という女の子はそれに気を良くしたのか、色々と話してくれた。
朝、早くに目を覚ましてしまった自分に絵本を読んでもらったり、海に連れて行ってくれた事を。そして、
怪我のことを言っていた事を話してくれた。

きなこは、明希に優しく怪我のことを自分で何て言っていたのかをそっと聞いた。
明希は「あのね、覚えてないと言ってたよ。何かね、恐ろしい目に合った気がするって
言ってたよ。その時ね、とても怖い目をしてたの。おにいちゃんが。」と言葉を濁らして答えた。
碧河は「怖い顔？」と言って俯き気味に真剣な顔をした。
それを見ていた明希は「また怖い顔になった。」と言った。
碧河は考え事をやめ、明希に「ごめんね。怖い顔して。」と謝った。
明希は「あの時と同じ事言ってる。」と微笑んだ。

きなここと稲垣は、『碧河が本当に凱歌なのではないか。』と考える光景だった。
きなこは分かってはいたが本当に碧河はホイに見えてしまいそうになった。

しかし、この子のお陰で2つの事がはっきりとした。
1つ目はここに居た男性は凱歌である事。2つ目は凱歌は記憶喪失になっていた事である。
碧河は明希の面倒を見ることにした。その間にきなここと稲垣が老人に話を聞くことに。
きなこ達は、老人に凱歌が倒れていた様子を聞いた。
老人によると凱歌は海にしばらく流されたような感じだったそうだ。
それ以外にこれといった情報は無かった。きなこ達は、警視庁に帰る事にした。
3人は話し合いの結果、老人と明希には、男性の正体については言わないことにした。

悲しむのではないかと思い、配慮した結果だった。

きなこ達が帰る時、明希はまだ碧河を凱歌と思っていたので、別れ際も「おにいちゃん、また遊びに来てね。絶対だからね！」と大きな声で言っていた。碧河には明希を騙している様で心が痛んだ。

—警視庁—

きなこ達3人が着くと、船木達刑事が3人の周りに集まってきた。相当気になっていた様だ。きなこ達は分かったことを刑事達に話した。そして、船木には男性の正体が凱歌である事を話さなかった事を報告した。船木は、「小さい子も居た事だし、それで良かったと思う。」と優しく言った。船木達国際二課の面々は、”王 凱歌が1211に連れ去られた”という真実がはっきりした事により、このままでは、凱歌の身が危険である事、再び狙撃を強制的にさせられる可能性がある事から、捜査のスピードアップを迫られることになった。刑事達は皆、苦々しい顔をして黙って、この真実に目を向けていた。

～第7章～＜死の閃光＞

明希達に話を聞いてから1週間。何も起きることなく時間だけが過ぎていた。刑事達の懸命の捜査でも凱歌の消息は一向に掴めなかった。そんな時だった突然、碧河を尋ねてきた男性が居た。彼は国際二課の部屋に入ると余りにもピリピリしているのにビックリしたような様子で碧河を呼んだ。碧河は彼を見てビックリしつつ、船木に許可を得て彼の元に向かった。きなこはその男性が妙に気になっていた。なぜなら彼は刑事にしてはラフ過ぎるという遊び感覚といった感じが合った。だか、その目には強い光が宿っていた。その服装にも不思議さがあった。彼は右手にだけ黒の皮手袋をしていた。更にコートのような物を着ていた。まるで素肌を隠す様に。この暑くなってきた初夏にである。何より碧河の態度である。碧河はその男に対して、時にはものすごく上の者と話しているかと思うと、同じ立場の人間、友人のように話をしていたのである。なによりも、彼の雰囲気、スナイパーとしての王 凱歌のあの怖い雰囲気を纏っていたからである。”危険な匂いがする”という表現が合っていた。

彼と碧河は、しばらく別室で話した後、彼は考え込んだような様子で帰っていた。碧河も厳しい表情で出てきた。

きなこは、碧河に「どうしたの？そんな深刻な顔して。」と言った。碧河は笑いながら「いえいえ、対した事ではないのですが。あの人は前の上司で、向こうで行なっている捜査の相談をされたんです。心配掛けてすみません。」と答えた。きなこは何かを隠している様に感じた。あの危険な感じの男性に関わる何かを。船木にきなこは碧河について聞いてみる事にした。そっと船木を別室にいざなって単刀直入に聞いた。「課長。碧河さんってここに来る前は何処に居たんですか？何者なんですか。」ときなこが言うと、船木は、「きなこくん、。実は分からないんだ。上から一切聞かされていないんだ。」と答えた。きなこは船木に更に強く聞いたが本当に船木は何も知らなかった。有り得なかった、こんなことは。

その時だったきなこと船木が居る部屋に、黒谷刑事がかなり慌てて駆け込んで来た。
中に居た2人はビックリしたがすぐにこの慌て振りから状況を理解した。事件が起きたのである。
黒谷刑事は「狙撃事件が発生しました。すぐに来てください。」と言い、戻っていた。
二人は、急いで部屋に戻り、事件現場を確認しに出かけた。

－30分ほど前のとある屋上－

黒ずくめの男が二人立っていた。一人はその手にライフルが握られていた。
あの殺人マシン・王 凱歌の愛器”ステアAUG”が。
もう一人はそのライフルを持つ男を監視する様に居た。
その男が中国語で話し始めた。
＜そろそろだな。準備をするんだ、王 凱歌。＞と。
そう、ライフルを持っていた男は王 凱歌だった。凱歌は言われるまま準備を始めた。
狙撃の準備を、。
凱歌に命令して後も静かに、独り言の様に何か言っていた。
＜貴様の腕は確かなものだ。だか、1211のスナイパーとしては要らないものが多すぎた。
だから、無くした訳だ。全く貴様を最高のスナイパーにした羅聡様には、敬服するばかりだ。
この劉冥を監視役に抜擢して頂いた事には感謝しきれない思いだ。＞
この劉冥と言う男は更に続けた。
＜しかし、俺も監視ばかりでは飽きるな。俺もスナイパーとしての仕事がしたい、。＞
劉冥も范と同じ1211のスナイパーであった。しかし、腕から言う中の上と言った所である。
凱歌が黙々と狙撃の準備をしていた。劉冥はそのことには慣れていたが少々腹を立てていた。
凱歌が準備を終え、時間が来るのをじっと待っていた。そして、。
＜時間だ。さあ、我らの邪魔する者に死の閃光を放て！＞と劉冥は冷酷な声で言い放った。
凱歌は静かに狙いを定め、その引き金を無表情に引いた。
「シュッ」と小さく悲しげにサイレンサーが声を上げた。
そして、ターゲットはその死の閃光に倒れた、。
凱歌は何も無かったように手早くライフルを片づけ始めた。
劉冥はターゲットが死んでいる事を双眼鏡で確認しながら言った。
＜さすがだな、王 凱歌。この距離からあのターゲットをね。范兄貴よりもやっぱり凄いな。＞
双眼鏡から目を離し歩き出した。その後ろから、無表情な凱歌が着いて行った。悲しげな背をして。
そして、凱歌の右手は震えていた、。、。

－事件現場－

きなこ達国際二課の刑事達が現場に着いた。そこは高層ビルの一室であった。
しかし、この部屋は高層ビルの最上階でだった。そこを狙撃したのである。
刑事達は、この現場の周囲に驚愕した。高層ビルの最上階であるだけ絶景だったが、
『ここを狙撃するのは？』と考えた瞬間、不可能だと思った。
なぜなら狙撃するには、目の前に見える約400メートル近くは離れているであろう高層ビルの屋上からしかできないのである。
きなこそして船木達、過去の狙撃事件を経験した者達は、他の者達よりも驚きは大きかった。

なぜなら、凱歌の狙撃技術が上がっていることをこの狙撃は言っているのである。

一応、船木は黒谷刑事と碧河に発砲地点の搜索を命じ、他の者は殺された男性の身元の確認を急いだ。そんな時だった稲垣が現場に居ない事に気が付いたきなこは船木に聞いた。

「あのう、稲垣さんが居ないんですけど。」すると船木は慌てた感じで答えた。

「ああ、稲垣君は残って写真からデータベースの確認を頼んであるんだ。きなこ君、写真を稲垣君に送ってくれ。」ときなこはデジカメを渡され、撮影を頼まれてしまった。

面倒だったが、デジカメで撮った被害者の顔をメールで送った。

—警視庁—

国際二課では、きなこから送られた写真から稲垣が身元確認をしていた。

そんな中で、稲垣に碧河から電話が入った。

「稲垣さんですか。碧河です。実は被害者の身元が分かるかもしれません。

ある組織の人間かもしれませんので調べて下さい。その組織は一です。」

稲垣はその組織の名を聞き、はっとした。可能性は十分にあったからである。

「分かりました。調べてみます。分かりましたら船木課長に報告しますので。」と稲垣は答えた。

「よろしくお願いします。」と言い、碧河は電話を切った。

稲垣は急いでデータベースに入り、検索を始めた。

数分後、検索結果が出てきた。その結果は、、、。

—事件現場—

船木達、被害者の周辺の現場検証を終え、発砲地点を確認しに行った黒谷刑事と碧河の連絡を待っていた。

黒谷刑事と碧河は、発砲地点を発見し、船木に連絡した。

「黒谷です。やはり400メートル近くはありますね。碧河曰く380メートルだと言っています。」

「380メートル！凱歌の仕事しか考えられないか。しかし、どうして腕が上がっているんだ。」と船木はぼやいた。きなこは複雑な気持ちで聞いていた。

『ホイさんは無理やりやらされているんだ。』と思っているが、それと同時に『腕が上がっているということは、、、』と考えると辛く悲しくなってしまった。

そんな中で、稲垣から連絡が船木に来了。

「船木課長ですか。稲垣です。先ほど検索が終わりまして、ヒットしました。」

「本当か。一体どんな人間なんだ。」と船木そして、刑事達は緊張した。

稲垣は少しの沈黙の後、落ちついた声で答えた。

「それがですね、、、。アジアで1211に次ぐ力を持ち始めた組織”PB”のナンバー3のジャオ・ティンです！恐らく1211が”PB”を潰しに掛かっているのだと思います。

今、日本に”PB”の幹部が多く来ているという情報もありますので。」

それを聞いていた刑事達は、再び狙撃が行なわれると直感した。

その時だった船木に別の連絡が入った。

それは、第2の狙撃の連絡だったのである。そう、凱歌は1日に、しかも短時間に二つの狙撃を行なったのである。

船木は、すぐに残りの刑事達と現場に向かった。もちろん、きなこと碧河もである。しかし、

碧河は移動中に誰かに連絡を入れていた。とても丁寧で上の者に報告する様に、。

きなこはさっき国際二課に来ていた前の上司という男に連絡しているのだと気が付いた。

－第2事件現場－

まさか1日に、しかもこんな短時間に狙撃事件が2件も起きた事に、刑事達は焦りの色が隠し切れなかった。

やはり、今回の狙撃も王 凱歌にしかできないような状況だった。

今回の狙撃は、被害者が店に入ろうとした時の一瞬だった。

こちらも200メートルは軽く離れた所からの狙撃であった。

船木は、今回の被害者も”PB”の関係者とみて、稲垣に身元確認をさせた。結果はやはりそうであったが、被害者はなんと”PB”のナンバー1つまりボスであり、しかも日本人であった。

「名前は威我 尚人（いが なおと）です。しかし、組織ではミャオ・ツァンという名を使っていた様です。」

船木ら国際二課の刑事達は、あっさり凱歌を使い、脅威になりうる組織を1日で壊滅に追い込んだ事に1211の怖さを思い知った。

「一体、凱歌を使って何人の人間を殺すつもりなんだ！」船木は、いとも簡単に狙撃を行なう事への怒りから叫んだ。

きなこは船木の叫びと同じ事を心の中で強く思っていた。そして、『ホイさん、どうして、。。』と、。。

－1211・日本支部－

<良くやった劉冥。これで”PB”は終わりだな。>

<はい。壊滅しなくてもしばらくは何もできません。>

<そうだよ。例の計画は成功の様だな。しかし、念には念を入れて一つ、凱歌にはやってもらいたい事がある。>

<それは一体何でしょうか？>

<今はまだだ。間が無さ過ぎるからな。一旦戻って来い。>

<分かりました。では、後程。>

ここで1211ボス・コー村木と劉冥の電話は切れた。

コー村木はおもむろに立ち上がり、窓から外を見ながら不敵に笑っていた。勝ち誇った様に。

その時だった羅聡がコーの部屋に入ってきた。コーは、羅聡に言った。

<入ってくるときはノックぐらいしたらどうですか。>

<すまんのう。ついうっかりしていたわい。>と羅聡は笑った。

<しかし、貴方のお陰で凱歌は最高のスナイパーになったよ。>

<いやいや。わしこそ、様々な実験をさせてもらってるからな。当然のことじゃよ。>

少しの間後、羅聡は言った。

<わしはそろそろ行くわい。大切な凱歌を見んといかんからな。>

羅聡はそう言って部屋から出ていた。

コーは再び窓から外を見ていた。

<凱歌、お前はもう私のものだ。最後にお前を試すことにする。究極の悲劇でな。>

言い終えるとコーは大きく高笑いをした。

恐ろしい惨劇がコーの頭の中には描かれていた、。

凱歌とその関係者を陥れる恐ろしい計画が、。

ー続く